

モンゴルにおけるジェンダーセンターの現在

持続可能な発展のためのジェンダーセンター代表 T. アムガランさんに聞く

T. エネビシ 今岡良子

アジア現代女性史研究会は、韓国・フィリピン・ベトナムで調査を行ってきたが、2007年7月末から8月初めにかけて、中国とモンゴルを訪問した。旅程は、次のとおり。

- 7月29日 日本発北京着
- 7月30日 北京発、列車でエレンホト着（中国内モンゴル自治区・モンゴルとの国境）
- 7月31日 エレンホトでモンゴル領事ミャグマルスレン氏と面談
エレンホト発、列車で国境を越えてウランバートルへ向かう。車中泊
- 8月1日 ウランバートル着。ウランバートル近郊タウトルゴイの軍事基地を見学
- 8月2日 ウランバートルで労働組合、ジェンダーセンター、第三ホロー訪問
アルハンガイ県へ向けて車で出発
- 8月3日 アルハンガイ県ツェンヘル郡役場を訪問、助役のバットジャルガル氏と面談
遊牧民がバリケードを建て金鉱開発から守った森林地域を見学
そのリーダーの1人で遊牧民の女性・ナランゲレルさん宅で宿泊
- 8月4日 ツェンヘル郡を発ち、カラコルムを経てウランバートルへ戻る
- 8月5日 ウランバートル市内で博物館やスフバートル広場を見学
- 8月6日 帰国

この旅行を通して様々な新しい発見があった。その中から本号では特にウランバートルで貧困地域の女性のために活動しているジェンダーセンターをとりあげて紹介したい。

これは、8月2日に行ったインタビューをもとに、T. アムガランの生きてきた時代と現在の活動についてまとめたものである。

Q：まず、ご自身のお話をしてください。

私の名前はアムガランで、父の名前はテルビシといいます。モンゴル人は父の名前を氏をつける習慣があるので、テルビシ・アムガランという氏名になります。母の名前はトゥムルトゴです。両親は2人ともウランバートルから西のウブスハンガイ県出身です。私自身はウランバートル生まれですが、両親の故郷を出身地と考えています、両親には、息子1人、娘4人がいて、私は上から3番目の娘です。



T. アムガラン

私は1969年に生まれました。子どもの頃から非常に活動的な子どもでした。小学校に入る前から読み書きができていたので、教師は私に他の生徒の宿題を見るなど、いろんなことをさせてくれました。こうして、小学校1年生のときから、生徒の中で、自然とリーダーになっていきました。当時の積極的な性格は、今でもNGOの活動に影響を与えているように思います。

誰でも、子どものころをふりかえてみると、楽しい思い出がいっぱいですね。人生の中で最も幸せな時のひとつは、やはり、両親や祖父母、兄弟で暮らしていた子どものころだと思います。だからこそ、「もし、子どものときに連れ戻してくれる列車があるならば、誰でも乗るだろうと時々思う」という歌も作られているのでしょう。

私の子どもの頃は、モンゴルの社会主義の時代です。人々は社会主義建設の活動に積極的に参加していたと思います。今になって考えてみると、社会のすみずみ、人々の心の中に共産主義思想が強く染み込んでいたように思います。私たちは西側とかかわりをもたずに孤立していただけでなく、国内でも閉ざされた社会の中で暮らしていたと思います。しかし、当時は、それに気付いてはいませんでした。

モンゴル人誰もが待ち望む楽しみは旧正月ですが、当時は、それも隠れて祝っていました。信仰にかかわる行為はすべて禁じられていたからです。おせち料理として羊一頭(オーツ)を蒸して来客に振舞うのが伝統的な祝い方ですが、オーツがあることを内務省に通報されるのを恐れて、他人が来たら隠していました。私の子どものころの思い出は、旧正月になると、僧侶の家を訪ねたことです。僧侶はたくさんご馳走してくれ、帰るときには真ん中に穴が開いた昔の銀貨をくれました。その僧侶には旧正月の時しか会いませんでした。私が中学校3年生のときに僧侶は亡くなりましたが、その僧侶が私の祖父であったことを知ったのは、亡くなった後でした。父は一人っ子で、親戚もあまりいませんでした。当時、父は革命党員であり、教師だったため、僧侶の息子と知られるのは、彼の人生に悪い影響を与える時代だったのでしょう。

1921年の革命以降、寺院は破壊され、僧侶は反革命のレッテルを貼られ、粛清の対象となりました。高僧は処刑され、下位の僧侶は還俗しました。その後、長い間、僧侶が社会的に認められることはありませんでした。父は旧正月の時にだけ、祖父に会うことを許されていたのかもしれませんが、父は、家の中でも、何も話してくれませんでした。

当時、どこ家庭でも、家族の間ですら、自分の過去のことや自分の心のうちをあまり話しませんでした。おそらく、それは1930年代に行われた「大粛清」が、心の中に強く残っているせいだろうと思います。

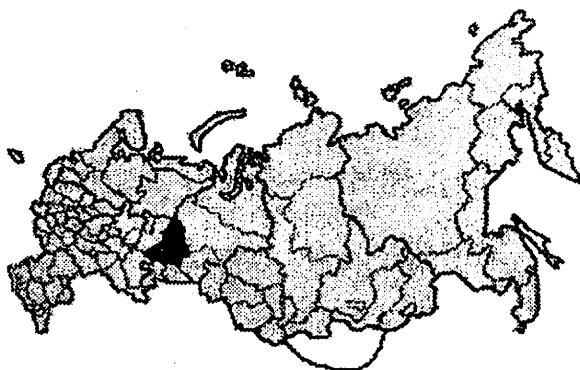
私が学生の時、父は亡くなりました。そして、私は同じ世代の人々と同じように、自分の血筋についてよく知らないまま、聞く機会も失いました。今でも母に尋ねますが、「あまり覚えていない」、「すっかり忘れた」と言って、答えるのを避けるのです。おそらく、当時の社会は母に自分の思うとおりに生きる機会を与えず、母もまた、心の中に抱いていた希望や夢を口に出さず、心の中にしまいこんでいたのでしょう。これが、社会主義の時代の閉ざされた社会の中で生きていた人々のありようです。

Q：学生時代は、ロシアへ留学されていたんですね。

1985年に高校を卒業して、ロシアに留学し、1997年までエカテリンブルグ(当時のスヴェルドロフスク市¹)に住んでいました。この時に知り合った夫と結婚し、子どもを生まれました。

最初のウラル地質学アカデミーでは、地質物理学を専攻しました。地下にどんな資源があるかを飛行機の窓から写真を撮って、分析する研究です。初めはロシア語で講義を聞き取るのがやっとでしたが、ロシア人

1 エカテリンブルグは、エリツィン前大統領の出身地。ウラル山脈の工業・文化都市。モスクワからおよそ1600km。2002年の人口120万人。



スヴェルドロフスク州はウラル連邦管区内に所属し、州都をエカテリンブルグという。

の教授らは、私たちをお客さん扱いすることなく、同じ連邦の人間と見ていたので、ロシア大学生と同じ扱いをしました。そういう意味ではロシア人から差別されたことはありません。

私の人生観はロシアに留学していた7年間にその大部分が形成されたと思います。多くのロシア人と留学生と接触し、異なる文化、異なる人々の中で、多くの視点でものを考える必要性を学び、また、自分とは何か、モンゴルとは何かというアイデンティティについて常に考える機会がありました。また、自分の力で生きるということ、さらに、自分と同じ

ように他者と助け合いながら生きていくということを経験することができました。

1985年にゴルバチョフが書記長になり、ソ連でペレストロイカが始まり、シベリアの地方都市スヴェルトロフスクの生活にも様々な変化が起こりました。

あとを追うように、モンゴルでもペレストロイカ、そして民主化が進みました。しかし、当時、モンゴルで何が起っているのか、まったく状況がわかりませんでした。スヴェルドロフスクは地方都市なので、モンゴル人留学生は、モスクワで起っていることも、ウランバートルで起っていることも、詳しく知りませんでした。政府が変わったということ、スフバートル広場でハンガーストライキが起こったということが断片的に伝わるぐらいでした。

それよりも、いきなり奨学金がもらえなくなり、私たち留学生はいきなり放り出されました。私たちは明日の食事のために稼がなければならなくなったのです。ちょうど私たちの留学中に国費留学の制度が終わったのです。その頃にはもうロシア語ができるようになっていました。中国の商品をもってモンゴルから来る商人(ナイマーチン)の中にはロシア語のできない人たちがいたので、彼ら・彼女らの通訳をしたり、必要な生活情報を教えたり、どんな商品が売れるかというマーケティング情報を教えたり、という仕事をしてわずかな収入をえるようになりました。私たち自身、途方にくれていたのですが、やはり、異国で困っている人もいて、その人が何をしてほしいか、ということをよく聞いて、支援するという経験を積みました。この経験が、今のNGO活動のもとになっていると思います。

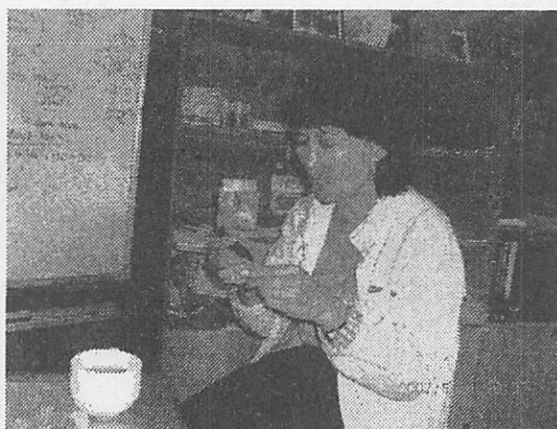
こうして、1991年にアカデミーを卒業し、夫とともに帰国しましたが、モンゴルは市場経済へ移行したばかりで、国営企業の民営化が強行され、失業者であふれ、卒業したばかりの私たちを受け入れるところはまったくありませんでした。祖国に突き放されたような思いがしました。

それで、夫といっしょに、またロシアに戻り、1992年にウラル大学に入学し、経済の勉強を始めました。子どもを育てながら、商人をサポートする仕事を続け、少しずつお金をためました。国境を越える商売で利益を得る商人は増えていきましたが、手に入れたお金をどのように使ったらいいかわからなかったようです。大金を手にしたことがないからです。ある人達は高級ホテルに住んだり、おしゃれな服を買ったりしていました。私たちは授業で株について学んでいて、民営化後に株式会社が生まれていたもので、貯めたお金をどう使うかというイメージをもっていました。それで、夏休みに帰国する度に、野菜貯蔵庫の会社の株を買って、留学中に80%まで集めていました。

こうして私たちはロシア滞在中、教室で学ぶだけでなく、知っている知識を使いこなして、自分の力で生きるということを学びました。そして、同じ、市場経済への移行の混乱をロシア人と経験しながらも、ロシア人の思想と行動が、私たちと違うということもよくわかりました。今まで、同盟国の兄弟としてロシア人

とモンゴル人は同じと考えていましたが、進む道がそれぞれ異なるということを実感しました。モンゴル人の「私たちはどのような社会をめざして生きていくべきか」ということも考えるようになりました。自分の生まれた国が大きく変わろうとしている時だからこそ、そこに参加し、かかわっていきたくて決心し、帰国したのです。

Q:帰国してすぐ、NGO女性情報研究センターに入ったのですか？



はい。1997年にモンゴルに帰り、私たちは、新しいアパートに住みました。住民は私たちを暖かく受け入れてくれましたが、特に、一階下に住む女性オユンツェツェグさんは大変活動的でやさしい人で、今の私がこのように活動できるよう、大きな影響を与えてくれました。今、国連の女性開発基金に勤めています。

オユンツェツェグさんは私に、NGO女性情報研究センターを紹介してくれました。最初、私はボランティア活動のつもりでしたが、特に女性が抱える問題について興味を持つようになりました。また、勉強する機会も増えました。2000年から2001年にかけて中欧大学で女性人権コース、2002年にはスウェーデン国立レグ大学のジェンダーコースで勉強する機会がありました。2003年から2005年にかけては、モンゴル国立大学経済学部で学士入学しました。今ではジェンダーの研究と活動が本業になっています。

90年以降、女性に関するたくさんのNGOができました。1992年には2、3のNGOが初めて設立されましたが、それらのほとんどが政党に所属していて、市場経済への移行を支援する目的を持っていました。それで、それらのNGOの人々やその他の女性に関する活動を目指している人々の間で話し合い、女性に関する情報を持ち、調査研究を行う組織を作ろうと、1995年に女性情報研究センターを設立しました。

具体的な活動は、モンゴルの女性に関するすべての情報を集めること、また女性たちにとって深刻な問題となっていることを調査して明らかにすること、モンゴル女性に関する問題やNGOの取り組みを国際社会に紹介していくことなどでした。

女性情報研究センターが設立された1995年には、「貧困」という問題が新しい問題として浮上りました。民主化以前、ほとんどすべての人が教育を受け、専門を活かした仕事に就き、生活において必要なものはほとんど満たされる暮らしをしていました。当時、医療や教育をけじめ、すべての社会サービスを無料で受けていたし、ほとんどの人が自分のためというより国のためと考えて働いていました。つまり、すべてを国のために尽くして、その代わりに国から援助して、支えてくれると考えていたわけです。急にこのシステムが崩れることであらゆる分野に問題が出てきました。自力で生活する習慣のない多くの人にとっては大変だったわけです。

女性情報研究センターは、1996年に市場経済への移行の中で女性たちの経済的状況はどう変わってきたかという調査を行い、1997年に報告書をまとめました。この調査によって、今までなかった概念、非公式セクターで働く労働者の実態について明らかになりました。

民営化が行われると一番最初に失業者になったのが、女性たちでした。女性たちが多く働いている食品・繊維・皮革工場などの軽工業や社会サービス部門から民営化を進めたからです²。この女性たちが、国境を越える担ぎ屋になったり、市場で売り子をしたりするようになったのです。そのため、この調査は結果を考

2 T.Amgalan(1998)'Shiljiltiin ue dekh Mongolin emegteichuudiiin ediin zasgiin baidal'

えずに民営化を強行したことは間違いではなかったかと確かめる目的をもちました。

失業した女性たちは非公式セクターで働き、家庭生活を、モンゴルの経済を支えています。今でもそれが続いています。ところが、政府は彼女らを守り、支援する政策を講じていません。そのため、私たちの目標は、女性たちが社会で活躍していることを認めさせ、また女性が抱える問題を明らかにし、さらに女性が自分で問題を解決していけるよう NGO を設立し、NGO が活動しやすいように支援していくことを新たな目標としました。

その結果、1997、1998年に、数多くの女性向けの機関が設立され始めました。たとえば、障害者女性向けのNGO、公務員女性向けのNGO、女性の健康に対して活動するNGOなどが新しくできました。それらのNGOが全て集まり、センターが集めた情報を公開するセミナーを開いたりしました。

1995年には、女性に関するNGOは8つ、「リベラル女性知的基金」、「社会進歩女性運動」、「女性法律家連盟」、「モンゴル女性連盟」、「女性情報研究センター」、「DVセンター」、「誠実な女性運動」、「シングルマザー女性連盟」がありました。それが、2000年になると37³になりました。女性情報センターは、女性NGOを定着させること、NGOの活動を通じて、女性が自主的に問題を解決できるようにするという目標を果たすことができました。

Q：それで、「持続可能な発展のためのジェンダーセンター」⁴と名前を変えたのですね。

はい。このように女性に関するNGOが活動を始めたので、私たちは、最初の目的を果たせたと思い、2000年にジェンダーと発展という問題に取り組むために名前を変えました。私は2001年にこの代表を務めるようになりました。

このように2000年から2005年にかけて行ってきた活動の目的は、政府の発展計画とその実行過程において、男性と同じように参加する権利を女性に与えるよう働きかけることでした。

特に、失業した女性たちを年金や手当の対象に含み、保護することだけでは問題は解決しません。女性は男性同様、様々な能力を持ち、それを発揮して社会に貢献する役割を持っていることを認めさせる必要がありました。

田舎ではまだこういう考え方が残っています。たとえば、田舎の遊牧社会である記者が5人の子どもを生んだ女性の夫に質問しました。

記者：「そちらの奥さんはどんな仕事をされていますか」

夫：「妻は仕事していません」

記者：「何で仕事をしていないのですか？日常的に何をしていますか」

夫：「家畜の世話をしたり、朝から晩まで5人の子どもの面倒を見たり、食事を作ったりしています」

実はその女性はたくさんの家事をしているが、それを仕事として認めないので、社会的に何もしていない、できない女性と考えるのです。女性の中にもこういう考え方が浸透しています。こういうことをジェンダー教育によって変えていかなければなりません。そのために、政策の中にもジェンダーの視点を取り入れ、男性にも、女性にも、浸透させていくことを目指しました。

2002年に、政府がジェンダーの平等の権利を満たすプログラムを立案するにあたり、私たちのセンター

3 文末に資料2として一覧表を添付。

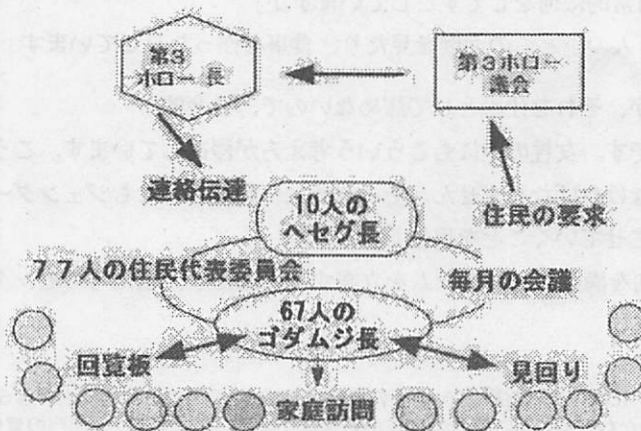
4 ジェンダーセンターは、モンゴルNGO法(1992年)に認可された組織で、5人の理事(女性3人、男性2人)、外国人参与5人、6人の職員、360人のボランティア(女性7割)がかかわっている。職員の代表がアムガランで、プロジェクト部門の責任者バヤスガラン、エネビシ、オドゲレル、エルデネソウド、ボロルチメグ、研究部門の責任者オノンがいる。



第3ホローの奥に広がるゴミ捨て場

は大きな役割を果たしました。以前は、女性に関する問題は厚生大臣の指導の下でだけ扱われてきましたが、私たちの努力で、首相の下にジェンダー委員会を設立し、法律や計画を作成するプロセスに参加するようになりました。

しかし、モンゴルでは法律を制定し、政策立案することは、社会主義の時代からいとも簡単に行われます。私たちは、初め、女性NGOが意見を述べ、政府がそれを取り入れて、優れた法律や計画を作れば、すべての問題が解決されるだろうと考えていました。しかし、実際に、そのプロセスに参加してみたら、期待していた結果には達しませんでした。5年間かかって、具体的な結果がでませんでした。このことは大きな教訓となりました。



10人と67人の住民代表を核にした第3ホローの自治

それで、私たちは活動の場を地域に移しました。2005年から2010年まで、地域住民といっしょに活動することを目標としました。これは、市民の意識を高め、生活の中で実践されなければ、どんな法律や計画を作っても机上の空論に終わり、具体的な結果が出ないということがわかったからです。

Q：それで第三ホローの住民運動とかかかわっていくのですね。

はい。中央で仕事をすれば、末端がついて



正面の天幕が町おこしセンター、右がホロー役場

くるという考え方は、社会主義の時代と同じです。末端の小さな社会の単位から世の中を変えていく必要を感じました。

ウランバートルの西のソングノハイルハン区に、第3ホロー（小区）があります。面積115.7平方キロメートル、人口12,000人、2,300家族が住んでおり、ウランバートルでも大きなホローのひとつです。ここにはウランバートルの大きなゴミ捨て場の1つがあります。住民の約80%は最低生活水準以下で暮らし、また最近では、田舎からの移住者がゴミ捨て場を頼って集中して住む地域となっています。

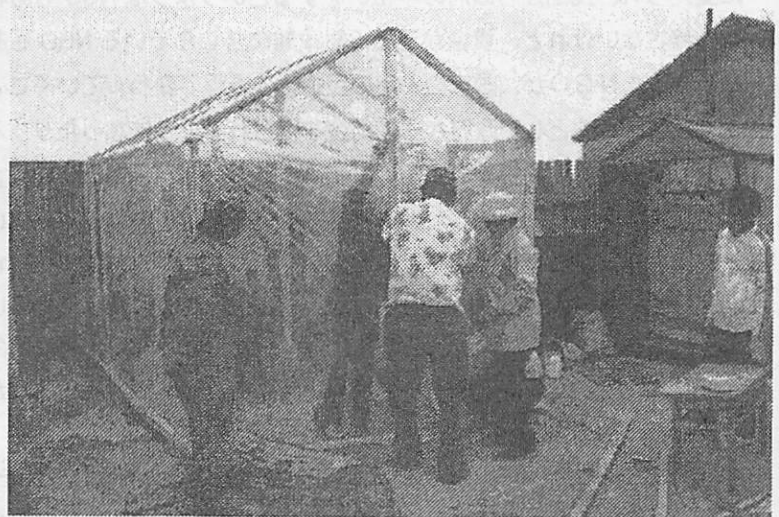
私たちがこの地域に注目したのは、ここが初めて女性がホロー長になった地域だからです。ホロー役場の許可を得て、住民と話し合い、住民の声を政治に反映させるシステムを作りました。住民は、ホロー内にある10のブロックとその下部組織の67のストリートから1人ずつ代表を選出します。10人のブロック長の内、9人が女性です。この10人+67人の代表は、それぞれの担当の家庭を訪問し、住民に必要な情報を届け、相談を受けます。毎月1度、「10+67住民代表者会議」を開き、住民の抱える問題を話し合います。住民の力で解決できる問題についてはすぐ行動計画を立案し、そうでない問題はホロー議会に請願書を提出し、地元企業にも協力を要請します。ホロー役場と議会は、区、市、国に住民の要望をあげています。

モンゴルでは1990年の民主化後、住民が行政に参加するきめ細かいシステムができず、外国の援助に依存する状態が続きました。しかし、この第3ホローでは、住民が貧困な生活をしていても、力をあわせて組織を作り、地域の問題を解決し、地域を発展させる自律的な運動を軌道に乗せています。

「10+67住民代表者会議」をもとに、2005年に最初の住民総会を開き、住民は医療・教育を充実させ、安全で美しいホローづくりをめざしています。ジェンダーセンターは、伝統的なゲル（天幕）を立て「町おこしセンター」設立し、住民の希望にもとづいて、次のような支援を行っています。

医療機関への協力と橋渡し：町おこしセンターでは血圧測定や心理カウンセリングなどを行っています。ホローの診療所では医師が足りず、待ち時間が長いため、診療所に通う住民と医師の負担を減らすとともに、必要に応じ住民に受診を勧めるなど、早期発見・早期治療を促進しています。

子どもへの教育支援：町おこしセンターでは貧困、虐待など様々な事情で学校に通えない子どもたちにモンゴル語、数学、法律学、パソコン、



野菜用のビニールハウスをシングルマザーの家庭に立てている

英語などを教え、普通学校に戻るための準備をしています。

女性クラブ：この住民運動の中核となったのは、社会主義の時代、公務員であった女性たちでした。その女性たちだけで、アルコール依存やDVの問題を解決するためセミナーを開いたり、法律が定めたアルコール非売買日に商店をチェックしたり、回覧板や夜回り被害を未然に防いだり、ゴミ捨て場から飛んでくるビニール袋などのごみを集めるなど、地域全体で取り組める活動を議論しています。

グリーンホロー計画：市場経済移行後、様々な理由で、一人で子どもを育てなければならなくなった女性は、年齢や育児のために就職の機会が乏しく、苦しい生活を余儀なくされています。特に、第3ホローではゴミの山でビンや缶を集めて暮らさざるをえないシングルマザーが少なくありません。そこで、2007年度の新しい計画として「グリーンホロー計画」を実行しています。ブロック毎に1戸、全部で12戸のシングルマザーの家庭を選び、作業班とします。まず、お互いに家の修理を手伝ったり、果実のなる木を植え、キュウリやじゃがいもなどの野菜の育て方を教えます。作業班はそれぞれのブロックで10戸ずつ、全体で120戸、3年間続けて360戸の家に果実のなる木や野菜を植えると、1,080本の木を植えることになります。これは、ホローを美しくすると同時に、ウランバートルの大気汚染を緩和し、CO2削減にも貢献することになります。ウランバートルの西のはずれで、ゴミ捨て場を抱える地域から、地域環境をよくする運動をしようと、シングルマザーたちは積極的に活動をしています。

今年は60キロのきゅうりを収穫し、40キロは瓶詰めなどにして売ることができました。また、手先の器用な女性がフェルトの工芸品を作り始め、手工芸のサークルが生まれました。

こうした貧困地域の自律的な住民運動は、モンゴル全体にとってもいい手本になるだろうと思っています。社会主義の時代も、民主化後の今も、モンゴルは外国の模倣を続けています。モンゴルは長年ロシア文化の影響を受け、今は西側文化の影響を受けています。しかし、自分たちの生活に根ざしたところで、何ができるかを考えることからやり直すことが、本当の私たちの発展への第一歩だと考えています。

Q：NGOにも様々なタイプのものがあるかと思えます。どこの国でも、政府の補助金を得て、潤沢な資金に支えられ、民間から政府の手伝いをするというようなNGOもあれば、政府から全く自律していて政府批判も辞さないけれど、資金が乏しく財政難に苦しんでいるNGOもありますね。また、当初は政府から自律的であったNGOが、国家の一定の民主化の過程で変わっていくこともありますね。リーダーが政権の中に入ったり、団体として政府から補助金を得られるようになったりする中で、政府からの自律性をなくす場合もあるようです。一般論ですが、飢餓や売春といった民衆の現実に立脚する活動より、政権に接近して政策に影響を与えることのほうが魅力的だと考えるNGOのリーダーもいるでしょう。

アムガラんさんの話によると、最初は調査、研究から始めて、それから政府に意見を言う立場になったが、期待していた結果が出ないことをわかり、住民のほうに注目したということですね。グラスルーツに向かうようになった、と。これは、私たちには珍しく感じられます。一般的には政府のほうにばかり目が向くようになり人々の抱えている現実に目が向かなくなるというような事例が少なくないようですが、それと正反対ですね。

今、センターが活躍している第3ホローの住民たちは貧困な生活をしているのは政府の政策が悪いからで、そういう意味でジェダーセンターは政府からの政策を批判しているのですね。が、その一方、政策に影響を与えるために、政府に提言するポジションは維持する必要がありますよね。そうすると、政府との距離という点で難しくなってくることは何かありますか？

政府に私たちの意見を表明することは難しくありません。なぜなら、私たちは政府からまったくお金をもらっていないからです。私たちは自由に意見が言えます。政府は一応意見を受け入れます。しかし、それを実践するのが遅い。それが問題です。

今年、私は、政府のジェンダー平等委員会の委員と、ミレニアム発展計画の委員になりました。首相に会う機会も増え、直接どんな意見でも言うことができ、一応、耳を貸してくれています。

しかし、私たちの場合は、今、地域住民とともに活動しています。住民は、「一応、耳を貸す」というポーズをとらない分、正直ですが、手ごわいと思います。しかし、理解すると、即実行に移してくれます。

そこでも、行政単位が一番小さい単位であるホロー役場と協力して活動しています。なぜかという、モンゴルは民主主義という道を選びました。しかし、民主化後、17年経った今でも、民主主義が私たちの日常に根ざしているかという、そうではありません。民主化したのですから、住民は、自分の抱える問題を述べ、それを社会的に解決するよう政治家や行政に求める権利があります。しかし、その手続きがわからないため、黙って我慢し、援助をもらってすませています。それでは、いつまでたっても、過去の社会主義の時代と変わらないのです。

第3ホローも、初めは、お隣同士話をしたこともなく、移住者が次々とやってくるコミュニティー不在の地域でした。しかし、今では、10人のブロック長と67人のストリート長がホロー内を歩き回り、会議をし、話し合うので、小さなコミュニティーがたくさんできました。これを核にして、住民の要求を吸い上げる機能をもつようになりました。だから、住民代表は、ホロー役場に対して、いつでも要求を述べるようになり、また、第3ホローを議員が訪れると、黙って演説を聴くことなく、次々と要求を申し入れます。そして、自分たちの要求を実現しないような代議員を支援するつもりはないと強い態度をしめすのです。ようやく、下から政治を誘導するところまで来ました。民主主義を選んだ私たちは、それを住んでいる地域にまず実現していかなければならないと思って活動し、ようやく、今そこまでたどりついてきたというわけです。こういうホローが他にもできていけば、モンゴルの政治は本当に変わっていくはずですよ。

Q：NGOを最初設立してから今まで援助してくれる団体がずっと同じなのでしょうか？それともファンドを減らされたということはないでしょうか？

一番最初の女性情報センター設立に際し、オーストラリアの Aus AID が 48,000 ドルの援助をしてくれました。翌年も、調査研究費用として、31,700 ドル。1997 年から 2003 年にかけて Aus AID の他に、Save the Children Fund、UNDP/PAPO、Soros Foundation、the Asia Foundation、Rotary club UB、Erel Co.Ltd、ISIS International Manila、Canada Fund Mongolia、WB、UNFPA、UNIFEM、ILO/IPEC などの国際機関や個人が資金援助してくれています。1年に平均5万ドルぐらいで、ある年にそれより高くなったりする場合があります。長年活動している NGO ということで国際機関は私たちをよく信頼してくれます。政府から経済的支援はもらえません。もちろん、政府から経済的支援をもらい、政府の意向にそった調査結果をまとめる NGO もいます。



アムガランとジェンダーセンターのスタッフ。後列左から2人目が、エネビシ。

Q：アムガランさん自身はどのようにして収入をえているのですか？

私の場合は、夫と息子2人、4人で住んでいます。夫は会社を経営して、生活を支えてくれています。私だけでなく、うちのNGOで働いている者は、賃金をもらっていません。

私たちは最初、学生の時に、この会社の株を買いましたが、私は今でも38%の株を持っています。だから、賃金をもらわない分、株の配当をもらい、家族の衣食に使っています。それ以外に、私の専門は経済なので、夫の会社の財政報告書を書くなどの手伝いをしています。

Q：モンゴルのジェンダー研究について

国際的なフェミニスト運動や理論の中で、モンゴルの女性運動がどのような位置にあるのか、はっきり位置づけた研究はモンゴルにはありません。モンゴルの場合は、社会主義の時代は、男女平等を達成したとされていきましたから、女性学やジェンダーの考え方は、民主化以降に新しく入ってきたものです。今、私たちは自分たちの風土と歴史が築いた文化の範囲内で受け入れようとしているところです。

モンゴルにおいて、女性が社会活動に積極的に参加し始めたプロセスは、社会主義社会を建設する時期と重なっています。70年間、社会主義者らは「男らしい」、つまり精神的に強く、男性と同じく努力する女性を褒め称えてきました。当時、社会主義社会の労働階級の半分を女性が占めていたので、一斉に解放運動を行い、女性たちに選挙権を与え、高等教育を受ける機会を作ったことは事実です。その時、「かまどの人」として家内に閉じ込められていた女性の長年の夢が実現され、それだけでなく、女性が国家を指導するレベルに到る権利を得るほど、自由を獲得しているように見えました。しかし、実際は権力を握っているのは男性であり、女性は複雑な立場におかれていました。

この実態を表現した優れた作品として、社会主義時代の女性に対する男性の態度を描いた「女性たちって」という映画があります。

社会主義時代、女性たちは農地、工場、建設現場で働いていましたが、彼女らはエプロンを脱ぐことはできませんでした。むしろ、男女の関係性はステレオタイプ化され、間違った方向にむかってしまいました。残念ながら、こうした隠れた事実を正しく説明したり、研究したりすることができなかったので、社会主義時代の女性からの現実に目を向け、主張し、改革することができなくなったのです。

私たちの希望、目指すところは、一人一人が誠実で人間らしく扱われること、その社会の形成に貢献することです。モンゴル人の男女の関係、女子、男子の生活様式に変化をもたらすことを期待しています。私たちはジェンダー思想の浸透とともに、モンゴルの社会が発展することを目的にしています。時間が経つにつれて、私たちの活動はさらに広がっていていることを感じます。

最近、大学や中学校の授業の中でジェンダーについての考え方を教えるようになり、私たちが講義に出かける機会が増えました。

Q：第三世界の女性たちについて

最近までモンゴルには「第三世界」に関して異なった解釈が存在していました。10年前、モンゴルは「第三世界」ではなくて、他の、社会主義の国々とともに「第二世界」に入っていました。当時の考え方では、植民地、暴力、搾取などは、豊かな資本主義社会の国々に成り立つ「第一世界」とアジア、アフリカなどの貧しい後進国「第三世界」との間にもみ存在するように考え、我々が入る「第二世界」にはないものだと考

えられていました。しかし、「第二世界」のソ連とモンゴルの間にも搾取はありました。

今、モンゴルは、「第三世界」に入りました。資本主義国や欧米の政治、経済、文化の影響を受ける国の1つとなりました。

モンゴル人は、ソ連の影響を受けていたので、自らをヨーロッパスタイルを持つアジア人だと考えてきました。だから、ソ連の人民が歩む道と同じ道を歩いていくと思っていました。女性もそうです。今、モンゴル人女性は、「モンゴル人」とは誰か、自分たちのアイデンティティとは何であるかということ自分の頭で考え始めた。そういう時に来たと思います。

Q：グローバリゼーションについて

世界中の国々はだんだん互いに緊密な関係をもつようになってきています。しかし、この関係がどの国にとって有益で、どの国にとって無益かがはっきりとわかるようになってきたと思います。しかし、モンゴルの場合はグローバリゼーションのマイナスの影響が理解されにくいのです。国連平和維持軍とアメリカの反テロ戦争の違いがわかりにくく、いずれも支援しています。しかし、これはモンゴル人全体の希望ではないと思います。私自身も、たいていのモンゴル人も、それぞれの国や民族の独立を尊重すべきで、干渉すべきでないと考えているはずで

Q：これからの取り組みについて

私たちが今計画していることの1つは、モンゴル人女性のオーラルヒストリーについてまとめることです。おそらく、これはモンゴルで初めて書かれるのではないかと思います。今は、まず、100人の女性の最初の聞き取りを終わったところです。この調査は一般庶民の女性の生活や記憶を掘り起こし、当時の歴史を明らかにすることです。特に、その時、その時の社会を女性たちはどのように考え、どう生きたかということ年配の女性を中心にインタビューをしました。12月にはまとまるはずで

今のところ、モンゴルには、女性の視点で書かれた歴史はありません。チミッドツェレン女史は、党の視点で、党の政策に従った結果としての女性の歴史をまとめました。しかし、今となっては、他に女性史がありませんので、貴重な本だと思

もう1つは、ウランバートルに第3ホローという拠点

まとめにかえて

モンゴルはソ連に次いで社会主義革命を遂げ、それ以来、ソ連の援助で社会主義社会を建設した。1990年に民主化し、ソ連から離れていくが、すぐさま、日本を議長として、西側諸国や国際機関が援助会議を開催し、再び援助漬けにあう。90年以降に生まれたNGOも、モンゴルの社会的問題を国際社会に訴えては活動資金を獲得する「援助の受け皿」になっている。

今頃は、このジャーナルの1号で、モンゴルの女性研究をまとめるために、多くの資料にあたっているう

ちに、NGOの調査報告に優れたものが多いことを知り、そのいくつかの団体を訪ねた。なかでも、「援助の受け皿」ではなく、自律的に社会を変革する中核的存在になりつつあるNGOが、このアムガランさんのジェンダーセンターと、エンフジャルガルさんの反DVセンター、ウランツォージさんの人権発展センターだったので、ジャーナルで紹介した。

今回、アムガランさんとじっくり話すことができ、ジェンダーセンターに多くのボランティアが集まり活動する理由がわかった。彼女が言うように、彼女の原点は、祖国にも放り出され、留学先の外国にも違和感を覚え、自分を支える社会システムがどこにもない中で、語学力を駆使してはいあがった留学中にある。その時に身につけた自律性が、ジェンダーセンターを「援助の受け皿」とは異なるNGOと育てている。また、今年取り組み始めたシングルマザーの自律のための「グリーンホロー計画」は、ロシア人が小さな畑で野菜を栽培し、冬の保存食を作るのを見てきたこと、経済学を専攻し、生産手段を手放すことが貧困への道であることを学んだことがもとになっている。どちらも、モンゴル人にとってわかりやすいこと、納得しやすいことを実践に移させる力をアムガランさんはもっている。

このグリーンホロー計画には、私はもちろん、モンゴル語の学生・OGと箕面の市民もかかわっている。今年、キュウリやじゃがいもを植えたシングルマザーの中からフェルトや皮の工芸品を作るのが得意な女性がいる。9月に大阪の北部にある能勢高校の生徒さんが文化祭でジェンダーセンターを紹介し、工芸品を販売してくれた。その売り上げを送ると、手工芸教室に通う人が増え、売り上げで原材料のストックを増やしたという返事が返ってきた。11月にゼミの学生と箕面の市民が、文化祭や学会で工芸品のお店を開いた。その後、シングルマザー3人が核となる手工芸グループが生まれ、第3ホローの特産物生産を目指し、またモンゴル西部ホブド県の女性手工芸グループと共同していくことになった。

こうしてますます関係が深まっていく中で、アムガランさんの活動の原点となる半生をまとめることができたことは、非常に喜ばしいことであった。

資料1 T. アムガラン著作

- “Shiljiltiin ue dekhi Mongol emegteichuudiin ediin zasgiin baidal” [移行期におけるモンゴル女性の経済状況], 1998
- “Biee unelegch okhidin baidal khandlaga” [売春をする少女たちの現状], 1998
- “Belgiin zamin khaldvalt ubchin, hunii darkhal khomsdlin virs.AIDS ubchind urtrukh magadlal undertei biee unelegchi, yankhan homosec-diin BZKU, KhDKhV,AIDS ubchnii talaarkh medleg, khandlaga ,dadal khevshil” [性病やエイズの感染者と想定されるセックスワーカーや同性愛者たちの認識と習慣、課題], 1998
- Yaduurlig buuruulakh khutulburiin gazrin “Emeeg bulgiin orlogo bii bolgokh tusiin unelgee” [貧困緩和プログラム「高齢者女性の収入増加プロジェクトの評価」], 1998 он
- “Jijig zeel dekh emegteichuudiin oroltsoo” [小規模資金供与政策に対する女性の参加状況], 1999
- “Gadaadin khurungu oruulalttai oyodlin uildvert ajillagchidin khudulmurlulkh erkh, khudulmur khamgaalalin tulub baidal” [外資系縫製工場で働く女性たちの権利と労働条件を守るための実態調査], 1999
- “Mongolin Emegteichuudiin nukhutsul baidal” [モンゴル女性の現状], 2000
- “Turiin bus baiguullaguudiin niigmiin salbart kheregjuulsen tusul, khutulburu” [N G O の 計 画 と 実 践], 2000
- “Emegteichuudiin turiin bus baiguullagin khugjil ba baiguullagin chadavkhi in unelgee” [女性を対象とするNGOの発展と評価], 2001
- “Ger bul dekhi khuchirkhiilliin talaar olon niitiin oilgolt medleg , khandlaga” [D V について の 市民 の 認識 と 課題], 2002.

- “Ger bul dekh khuchirkhiiliin esreg khuuliin talaar UIKhin gisyuudiin sanaa bodol”[反DV法について国会議員の認識],2003
- “Mongol ulsin jenderiin baidlin unelgee”[モンゴルにおけるジェンダー状況の評価],2003
- “Jenderiin asuudlig salbarin bodologo, tulubulultund tulgakh strategi”[ジェンダーの問題について、各論を解決する戦略],2003
- “Tusviin uil yawtsad irgenii niigmiin oroltsoog khangakh ni”[予算執行のプロセスに市民が参加する課題],2005
- “Jenderiin surgaltin moduli”[ジェンダー学習モデル],2006
- “Khugjiliin berkhsheetei irgediin yaduurlin baidal ba shine khudulguunii uusel,khugjil”[障害者の貧困状況と新しい運動の発展], 2007 ON

資料2 女性に関するNGO

組織名	代表	連絡先	活動概要
1 持続可能な発展のためのジェンダーセンター	O.Oyuntsetseg	11-325627 wlr@magicnet.mn	省略
2 アリオンサナー・センター	A.Tsetsegmaa	-	青少年の性教育
3 ガル・ゴロムト運動	D.Mnkhuu	11-329570	社会秩序を取り戻す運動
4 家族相談センター	Kh.Oyunchimeg	11-324729 11-383840	若い夫婦を対象とする相談
5 国際平和女性連盟 (モンゴル)	N.Tsogsuren	11-324586	モンゴルに対する援助、家庭のしつけ、セミナー、日本文化の紹介
6 ジェンダーと発展センター		11-322465	ジェンダー研究
7 “イヴェール”協会	J.Oyun	11-320431	女性の教育
8 リベラル女性知的基金	O.Enkhtuya	11-328558 leos@magicnet.mn	女性指導者の育成、政治参加の促進
9 モンゴル日本女性共同マンドハイ協会	P.Davaa	11-341865	モンゴルを日本に紹介、モンゴル・日本女性の共同支援
10 モンゴル女性連盟	N.Gerelsuren	11-327723,11-328336 monwofed@magicnet.mn	女性の権利を守り、母子の健康を守り、女性の経済活動を支援
11 モンゴル女性法律家連盟	D.Atantsetseg	11-322212 mwla@magicnet.mn	女性の権利と名誉を守るため法的な助言
12 モンゴルビジネスウーマン連盟	O.Zaya	11-384027	ビジネスウーマンの活動を支援
13 モンゴル女性経営者統一センター	P.Subd	11-343143	個人経営者女性の支援
14 モンゴル社会民主女性運動	M.Tungalag	11-321204	女性指導者育成
15 モンゴルガールスカウト連盟		-	ガールスカウト
16 モンゴルサラナ・エイジ協会	O.Doljinsuren	11-452749	名誉の母
17 モンゴル地方女性連盟	Z.Nasanjargal	11-313347 11-311156	地方女性の伝染病予防、13以上の女性へのアドバイス
18 モンゴル言語・聴覚障害女性の権利を守る連盟	O.Selenge	11-372884	盲ろう障害、聴覚障害を抱える女性を支援
19 社会進歩女性運動	Ts.Ariunaa	11-322340 wsp@magicnet.mn	民主主義の発展とジェンダー平等を實現する。
20 ボヤンバドラフ道の運動	Dulamasuren	945669 943220	女性の専門資格の取得、家族計画の普及
21 ホエルン母センター	D.Nonna	11-365565 11-451908	牧民家庭やゲル地区のドロップアウト児童の教育、就学前児童の両親の教育
22 地方女性発展支援基金	Ch.Otgonbayar	11-312623 11-329728 112326329	ジュネーブ宣言の実践、地方女性の労働の評価
23 国境警備隊女性連盟	G.Narantsetseg	-	国境警備に携わる女性の権利を守る
24 反DVセンター	Ch.Sosormaa	11-362375 mongolcav@magicnet.mn	女性や子どもに対するDVの防止と保護

25	子どもと女性の基金	Ch.Altantsetseg	-	県都の女性や子どもの生活支援
26	ウランバートル市女性連合	P.Altantsetseg	11-322913	ウランバートルに住む女性や子どもの権利を守る
27	「科学と女性」協会	Ts.Sarantuya	11-326409	研究者・教育者女性を支援
28	モンゴル民主社会主義女性連盟	D.Altai	11-321137	女性と子どもの権利保護、零細企業設立支援
29	女性民主運動	G.Tsogtsolmaa	11-457591	民主主義のための運動に女性の参加を促す
30	女性と自然と発展運動	B.Bayasgalan	11-327271	自然環境保護、貧困緩和、持続可能な発展への女性の参加支援
31	母子基金		-	ドロップアウト児童、ストリートチルドレンの子どもの保護・教育
32	働く高齢女性のための連盟	D.Semjidmaa	11-455830	高齢な女性労働者の権利保護